

# 想うがままに

## 寄る辺を求める人びと

本誌編集委員 小寺山康雄

昨年七月二十九日の参院選での自公惨

敗、民主圧勝の余燼冷めやらぬ一〇月

三〇日、国会での党首討論をとりや

め、福田康夫首相と小沢一郎民主党党

首の会談がおこなわれた。一月二日

には第二回会談がおこなわれ、両者は

「大連立」することに合意した。とこ

ろが小沢にとつて予想外だったのは、

持ち帰った民主党で「大連立」が拒否

されてしまったことである。

例によってプツンしてしまった小

沢は、一月四日党首を辞任すると表

明したが、舌の根も乾かぬ七日には辞

意を撤回した。

駄々っ子小沢一郎

煽て唆すナベツネ

九三年八月、戦後一貫して続いた自

民一党支配に終止符を打ち、細川連立

政権誕生の推進力になったのは、同年

六月に自民党を脱党し新生党を創設し

た小沢である。そのとき小沢は「二年

間予算編成権から遠ざければ、自民党

は干上がって自滅する」と囁いたが、

わずか一年で自民党は社会党、さが

けを抱き込み権力に返り咲いた。

自民党復権に貢献したのは、社会

党、さががけを疎んじ小馬鹿にした小

沢である。「壊し屋」「剛腕」の威名を

誇示する小沢であるが、自分がつくつ

たものでも気に入らなくなったり飽い

てしまうと、積み木を壊す駄々っ子の

ようなお坊っちゃんなのである。

「民主党には政権担当能力がない」。

「参院選勝利で浮かれているが、この

ままでは次の選挙では勝てない」。「政

策実現のために政権党と連立して何が

悪い」。党首でありながら、こうした

ことをいけしゃあしゃあと言つてのけ

る小沢も小沢なら、それを批判するど

ころかひたすら辞任を慰留する菅、鳩

山以下の民主党幹部も民主党幹部であ

る。彼らは「大連立」が民主党に託し

た有権者の期待を裏切ることには気づかないか、気づいても我関せずの態度に終始している

この駄々つ子お坊っちゃんを煽て唆したのが、中曽根康弘元首相大勲位と渡辺恒雄読売新聞会長・主筆である。二人は消費税大増税、銀行、大企業優遇、そして念願の改憲のため、ドイツを範とする大連立を実現すべく陰謀画策した。読売新聞は渡辺が自ら筆を執ったといわれる八月一六日の社説に始まり、十一月五日の社説に至るまで、六回も大連立キャンペーンを張った。昨今のマスメディアの権力迎合は目に余るものがあるが、今回の読売は突出している。「国土」渡辺にとつて参院選の結果は「国難来たる」なのだろう。「大政翼賛会よ今一度」の報道に徹したのもむべなるかなである。

## 『シッコ』の世界

ぼくは参院選では「九条ネット」に

微力を尽くしたが、民主党の勝利、自公惨敗を素直に喜んだ。

小泉政権以降、この国は限りなくアメリカ化してきた。日米資本主義はまるで本源の蓄積時代に戻ったかのである。中高年は解雇に怯え、若者は求職に血眼になつてゐる。非正規労働者は三分の一をこえ、女性にいたつては半数をこえる。貧乏人は絶対的に窮乏化し、富は富裕層に集中集積してゐる。昼食に一万五〇〇〇円の鯛茶漬御膳を食する階級が六本木ヒルズに盤踞する一方で、餓死寸前もしくは本当に餓死する階級が存在する。わずか一〇万円の街金からの借金に追い立てられて一家心中する。

医療・福祉・交通・教育・住居などの公的部門の民営化⇨営利至上主義はとどまるところを知らない。金さえあれば八〇歳でも生命・医療保険に入れると、アメリカ渡来の保険会社のCMは喧しいが、国は保険料滞納者から容赦

なく保険証をとりあげ、必要な最低限の治療も断念させ病死に追いやる。

マイケル・ムーアが『シッコ』で描くように、アメリカでは治療費を支払えなくなつた患者は街中に捨てられる。限りなくアメリカ化したこの国であるから、さつそく模倣し、つい先日、堺市の病院が同様のことをした。

農村は疲弊し、商店街は軒並みシャッターを降ろし、中小企業は毎日の資金繰りに追われている。障害者は支援なき自立を迫られ、生活困窮者は生活保護の申請すら役所の門前で拒否される。痛みは十分すぎるほど味わつているが、小泉、本間、竹中らはまだ足りないとはぎいてきた。

## 寄る辺としての「対抗社会」の再構築を

有権者は痛みに耐えられないとようやく思い始めた。そこに民主党の「生活が第一」のスローガンが登場した。小泉以上の「構造改革」を主張

し、軍事大国化を唱えていた民主党が選挙向けとはいえ、農家への戸別所得補償、子ども手当での創設、教育予算の増大、医師不足解消、年金行政の改革、イラクからの自衛隊の撤退、テロ対策特措法延長反対など、福祉国家的で平和主義的政策を打ち出したのである。

これに対して安倍晋三は「戦後レジームからの脱却」を唱え、「軽武装・経済成長・包括的国民福祉」の戦後保守政治のテーマをかなぐり捨て、靖国史観の復活、中国、北朝鮮敵視政策、弱者切り捨て、改憲を正面に掲げ、彼の祖父が果たせなかった「大東亜の盟主」たる「美しい国」を夢想した。右翼ナシヨナリストはエースの登場に歓呼の声をあげたが、竈の火が消えて久しい民は「生活が第一」に票を投じた。

自民党は敗れるべくして敗れたが、自らの足を喰う愚を重ねてきた公明党

は支持者に造反された。「構造改革」の痛みは公明党の支持層を直撃しているのに、創価学会を護持し池田大作の国会喚問を避けるために支持者を裏切つて、国家権力に諂つてきた報いを蒙つたのだ。

平和と福祉を掲げ、政治から疎外されてきた都市貧民層を政治的に組織してきた立党精神からはるかにかけ離れ、立身出世し、権力の旨みに酔い痴れる学会と公明党幹部は「そんなの関係ねえ」のだろう。

造反はまだおすおすとした形でしかあらわれていないが、いずれ大きな火となつて燃え上がるだろう。尼崎市長選、大阪市長選における学会婦人部の活動力の鈍さはその端緒である。

小沢の裏切り、菅、鳩山の優柔不断にもかかわらず、有権者は民主党への期待をまだ失つてはいない。大阪市長選の民主党の勝利と各種世論調査の結果がそれを裏付けている。現行選挙制

度の下では、現状を少しでも変えるためには、第三党以下に期待しても、第二党の民主党に投票することが現実的であると、切なくもしたたかな選択を有権者は強いられている。民主党内の社会民主主義的勢力はそのことを肝に銘じて、民主党の改革に奮闘するべきである。

しかし、ぼくらがなすべきことは他にある。この国に決定的に欠けている人びとの寄る辺をつくらねばならない。協同組合、労働組合などを対抗社会として再構築し、地域に助けあいのネットワークを張ることである。職場、地域、学校で反戦平和、生活・人権擁護を闘い抜くことである。対抗政党はそうした地の塩のような営為の積み重ねの中から形成される。

グローバルイズムと新自由主義に対抗する運動が中南米で、西ヨーロッパで、韓国でたしかかな勢力として登場しているのが、ぼくらの希望である。